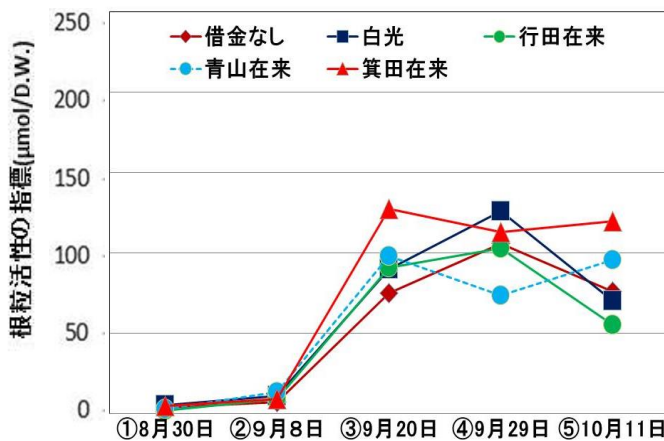


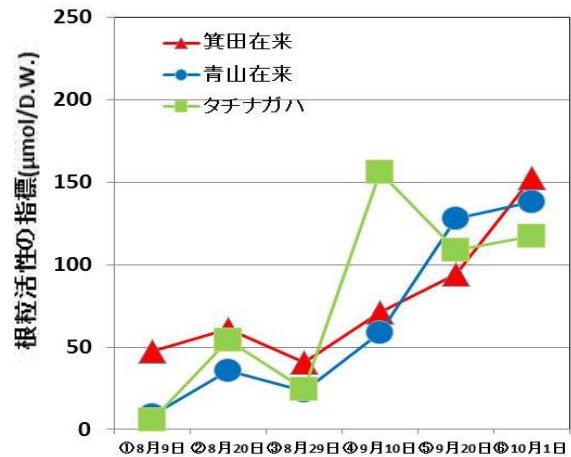
## 有機栽培に適した在来大豆の選定

地域により品種が様々な在来大豆の中から、有機栽培に適した生産性の高い有望系統を選定し、その施肥方法を検証しました。

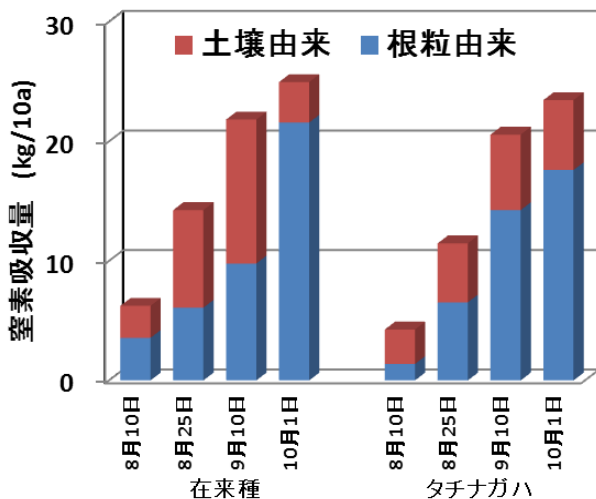
有機栽培には、窒素固定能力が高いことから「箕田在来」と「青山在来」が適していました。また、これらの在来種の根粒活性は生育後半まで持続するため、鶏糞の施用で窒素吸収量が多くなり、増収効果が期待できます。



在来大豆5品種について、生育段階ごとの窒素固定能力(根粒活性の指標)を比較し、有望系統「箕田在来」、「青山在来」を選抜した。



選定した在来大豆の根粒活性は、生育後半まで持続した。



在来種の窒素吸収量(土壌由来)は多く、収穫期の窒素吸収量(根粒由来)も増加しました。

試験区	品種	収量 (kg/a)	異常粒率 (%)
無施肥区	箕田在来	26.4	4.4
	青山在来	28.8	6.2
施肥区 (鶏糞)	箕田在来	35.9	8.8
	青山在来	39.8	9.8
施肥区 (緑肥)	箕田在来	28.8	11.3
	青山在来	35.8	8.0
施肥区 (鶏・緑肥)	箕田在来	32.3	7.8
	青山在来	32.3	10.5

在来種(箕田・青山在来)では、鶏糞施肥区(N2: 97%, 10kg/a)の収量が多くなりました。

本技術は、県内事例(埼玉県小川町など)の有機栽培大豆の生産管理技術の解析から体系化を図ったものです。

(農林総合研究センター 農産物安全・土壌担当 TEL 048-521-9461)